

4712

943

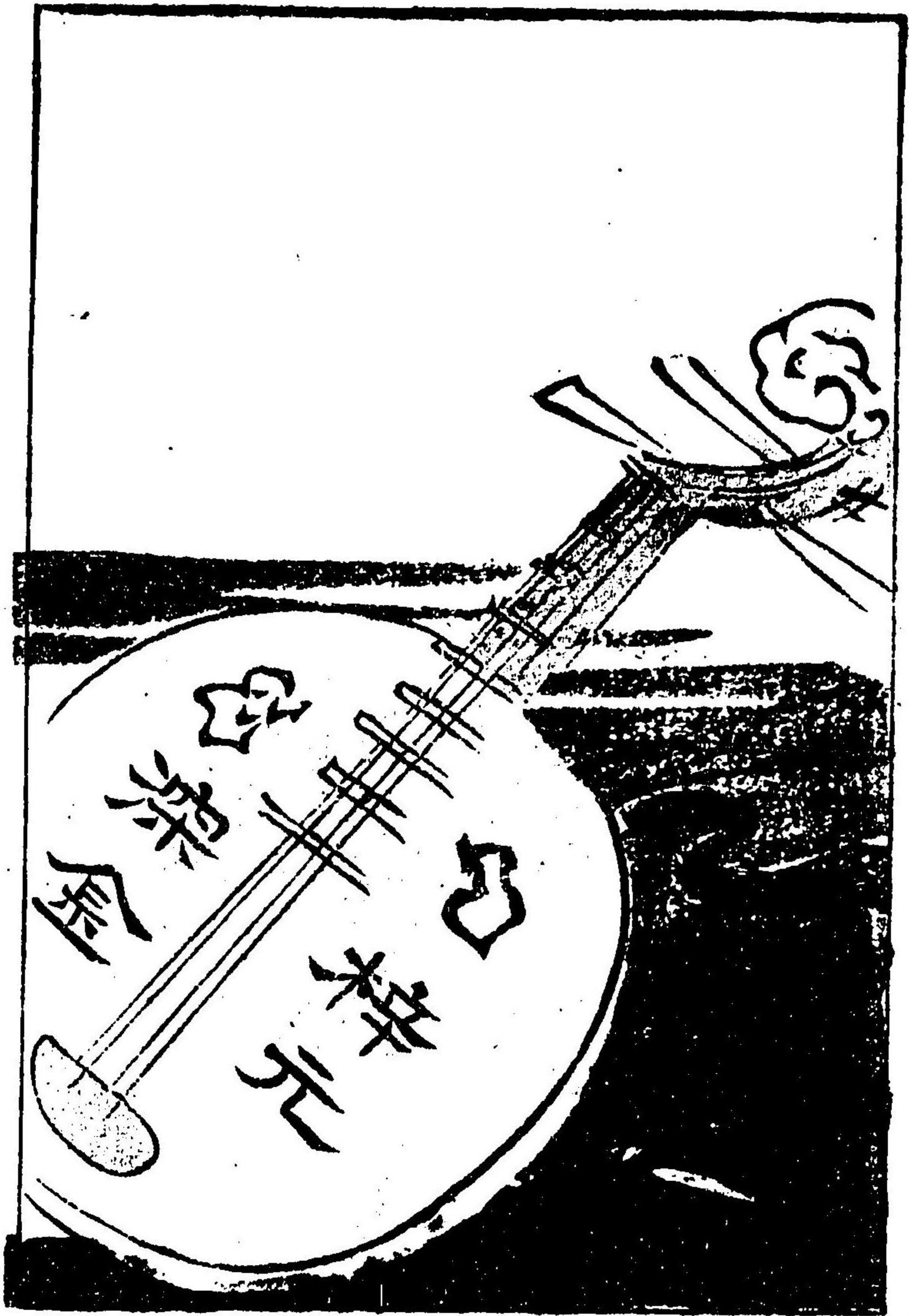
義士銘傳

金壽堂版



四活刀





大石主税良金 行年十六才

良金の良  
雄が  
我  
衆小勝れ十五才  
あそびと共小盟約  
の列ふ加り関東  
より下り垣見左内と称せ討入りの時搦手の大将と兼  
り吉良左兵衛と戦ひ抜群のまらきへ衆目を驚かせり







身垂虎口  
方安聖  
命棄鴻毛  
更疾呼



服部一郎



片岡源右衛門

田野金右衛門

堀部安兵衛

大石内藏助

菅谷半之丞

前原伊助





三十一

四

三十一



小野十内秀知 高百石 江戸に在りて小野十菴と変名し操療治とあ  
 して諸家へ出入りし妻の夫の本望達せしと聞自害して死したりと云  
 藤田新左衛門 高百石  
 國東 下り商人の身  
 とやつし 朝夕敵のやうと  
 のやうと 大石内蔵助  
 と搜り 大石内蔵助  
 知らぬ

又 赤垣源蔵正賢 高二百石  
 性質大酒と好といふも取  
 れと乱せし事多く元來剛  
 勇なり浪人中も常々  
 満酔せしことかく  
 然れども主君の忌目  
 露程も酒肴と用ひざり  
 討入りの時一瓢の  
 酒と腰



終本 懐とと  
 げさり 向新六光  
 風行年廿五  
 力量抜群  
 匠の業と慰  
 とま浪人  
 て后俊は太工  
 職とあり吉  
 家へ込堅

今の働とき







津久井利右衛門和久半  
 大夫吉良家の臣を  
 武勇過れしものあり  
 大石討入の時  
 天小働さし  
 杉野十  
 平治  
 過  
 て泉水も落  
 とし鎧も突  
 せし不幸にて  
 生延け



間  
 重次  
 郎元興  
 喜兵工光延  
 婿  
 男を  
 ありし王家  
 滅亡の後難苦

六  
 浅野家の近習役と勤しむが退  
 去の後老母次房の志と察  
 て自殺せしが討入の夜も母  
 のころざしとあかしく  
 せしと抜群のそらりき  
 為したるしとを



大高源吾忠雄 高若五人杖持 行年三十二才

忠雄ハ徘徊ニ能ク

其角ト云

其角ト云

其角ト云

其角ト云

其角ト云

其角ト云

其角ト云

其角ト云

其角ト云

其角ト云



間喜兵衛元延 高百 行年六十光延ハ

宝蔵院

鑓の達人

あて一家

中の師範

入の時件二人

志と同ふせ

矢頭右衛門

梶原景時

父ハ病臥

強ク内蔵助







村松三太夫高直 行年  
 高直六隆四の  
 長男未だ部屋  
 住の若者やう  
 或る刀屋へ研の  
 註文をやり置き  
 了が出来の上たの  
 見んとて店先  
 の柱と撥打  
 ぶや  
 ありを  
 切込  
 こころを

吉良方  
 清水一角



磯貝十郎左衛門正久  
 行年五若 正久は亡君葬  
 送の時泉岳寺の墓前  
 て殉死と遂んとせしと片  
 岡源五右衛門さう詞と  
 尺にて留めしより  
 漸々思ひ止り本國へ  
 帰りて大石は徐  
 意と告げ大義  
 の盟約まかり  
 たり

●高直五若  
 行年五若  
 駿武ハ大  
 兵身  
 身六尺余り  
 ありかあつたを強  
 △馬廻りと勤  
 めが東都ふ下り赤垣と共  
 芝不住し武助と喪名して  
 身分と社家安ふなり時  
 遊興不事寄と敵の奉動と探り密  
 計と施し本意と達したり





潮田又之丞高教 高三百石 行年三十才  
 元古田織部正潮田主水  
 長男あり  
 主水内蔵  
 之助薦め  
 又之丞と漢  
 野家の臣とあむ御救  
 忠勤忽りや國繪  
 岡後と勤無文  
 討つ不思義  
 事どもあり  
 中村勘助正辰高  
 行年 正辰赤穂と退居  
 一君と母との ● 早身



○して江戸  
 下る時  
 伏見ぞ  
 大野貞  
 九郎と逢  
 けれ其非  
 義と責  
 てあり  
 殺し  
 富森助右衛門正固  
 高三百石 忠孝両全の  
 行年三十才  
 士あり夜討のとき比  
 類なき働きせり  
 三村治郎  
 左衛門と常  
 五面三人扶持  
 行年三十才  
 敵上野介  
 の首と小舟  
 を基野へ  
 送るも危中  
 ×の守り護り尤水練の遠人と云





不破敷右衛門正種 高百石  
 行年三十四才  
 正種は濱奉行と勤りが試斬と好むの癖ありて或時肥満の死骸と掘りて腕と試せしが露頭して表向手討と称し陰に髪を切て金子數多賜り放ちたるに恩義小感して主家大妻の後大石を請ひ然る本意と違ひたり



孫本夫 重盛  
 の養子也  
 て近松勘六が弟あり家滅亡の後丹下と異名て刀劍類の目きと業とあり  
 夜討の討入の夜も

●銘刀と帯せし故敵と斬る事無き以て草と称するが... 誠小目覚... 傷とあり...  
 横川勘平 宗利  
 西三人扶持の宗利  
 年三十七才  
 宗利は浪人して後江戸芝の邊ある伯父の家より寄居しけるは伯父復讐の盟ありと知りて頻に奉公と勧めし肯せず本懐と遂に習習市中と賣歩行仇討の連中より宗利の名ありと見てはゆて其ころぎりと知り大に感欺しける



小野寺幸右衛門秀當 部屋住  
大高忠雄 弟やて十内の養子とあり  
未だ廿日も立さずよま家の滅こ去れども  
志鉄石の如くよと盟約ま加り終り



誠忠の名を後

浪野家へ使者の事と承りし途

大石瀨  
左衛門  
信清  
高百石  
行年七十九  
旧本多家



中同家よ許訟事ありと聞取ふ之と裁  
断したと後内近殿玉ひ請て家  
臣とや馬廻りと勤め義士と共  
美名と千載小残たりし  
堀部弥兵衛金丸 隠居  
山本流の軍學よ  
達せし瞿  
老人  
間瀬  
九郎正辰  
部屋住  
行年五十九  
久太夫が子あり  
量衆不優れ百斤の石と重しとせは廣同番と勤めりし主家

●滅この  
後兼苦  
△身  
と寒  
口望  
遂にあり  
これの勇士あり





武林只七隆重 高三人扶持 行年三十一才  
 先祖八明国の副郎官武林  
 隆なり朝鮮陣のとき浅  
 野家ふらり帰伏して  
 臣となる只七其孫あり  
 内匠殿とい乳兄弟あり  
 一入恩義も深きゆへ討入  
 の夜衣不抽  
 血義  
 岡島八十右



門常樹 高若五人扶持 元來猛烈の士あり王家滅亡のとき大野  
 行年二十九才  
 九郎兵五の非道と憎大罵りけん  
 長れて逃亡したる後吉良の中間部  
 不菓子賣とあり入込安喜買と  
 敵のやうにさうり  
 千葉三郎兵衛  
 高百五十五  
 行年三十一才  
 故あり  
 勘氣と蒙り  
 居るまゝ夜討望み死  
 以て詫をかりたりと 具賀弥左  
 門  
 信 高三人扶持 行年三十四才  
 大石海き  
 慮ありて義士五十八回  
 と花と返さめ  
 未熟の者いふ  
 心せしとを





高三百石  
 行年五十五  
 旧姫路の  
 藩士たり  
 原總右衛門  
 天辰  
 一統是方便りと得  
 込敵のすそ内通  
 種々小治と云々  
 神寄與五郎  
 討取

本懐と達したり  
 志を固く終ふ  
 故に元辰二層  
 んと自殺も  
 機をさつ  
 れ不力を添  
 せとま  
 とも母の  
 後赤穂の臣と  
 曾て大義と興  
 大坂小退去  
 討取

明治十九年八月廿五日  
 編者 兼出 版人  
 牧金之助  
 後草區南元町十番地



